



タイのマックルック駒の調査による 日本将棋の起源に関する研究

奈良県立橿原考古学研究所 調査部

主任研究員 清水 康二

1. 研究の目的と背景

1970年代にタイのマックルック（タイ将棋）と日本将棋が類似することから日本将棋の起源が東南アジアにあるという説が提起されたが、この問題は未だ解決されていない。助成研究者は東南アジアからの影響を否定し、8世紀にインドから中国へ伝来した将棋類が中国で独自の改良を経て日本に伝わったと考えているが、まだ十分な結論を得ていない。現在、東南アジア諸国の中で、タイのみに12世紀に遡る可能性のある将棋類の駒が出土している。マックルックと将棋の重要な類似点として、「歩兵相当駒が相手陣内の3段目で裏返して成り駒になる」ことが指摘されており、このルールが東南アジアあるいは日本で確立されたのかは問題解決の鍵となる。したがって、マックルック駒を現地において資料化し、駒の形態を調査することにより、「上記ルール」がタイにおいて12世紀まで遡れるかどうかを確認することで、日本将棋の起源が東南アジアであるかどうかを明らかにする。

近年の助成研究者を含めた将棋史研究の成果として、日本列島への将棋伝来の年代については、10世紀後半～11世紀前半とする説が有力となっている。ただし、伝来ルートに関しては未解明な点がある。日本将棋は文字駒、平板形であることなど中国象棋の影響が強い反面、歩兵が3段目で成り駒となり裏返すこと、銀将相当駒の動きが共通するなど東南アジアのマックルックとの共通性が指摘されている。そこで、中国に早く伝わった将棋類は、東南アジアの将棋類が中国南方で影響を与え、それが日本列島に伝わったという仮説が提唱されている。しかしながら、現状では東南アジアの将棋類に関する資料は12世紀までしか遡れず、中国へは9世紀には伝来したことが確認されている点で成立しがたい仮説である。

今回の調査研究では、伝来ルートを明らかにする方法として、マックルックのピア駒（歩兵相当駒）に着目する。ピアとはタイ語で貝という意味であり、現代のマックルックでも宝貝などが使用されることがある。ピア駒以外はチェスと同様の立像形駒であり、平板形駒の日本将棋とは異なり、反転して使用することはできない。したがって、最古のマックルック駒の形状が反転不可能な形態であった場合は、13世紀以前のマックルックのピア駒（歩兵相当駒）には駒を裏返す機能がなかったこと

になり、マックルックと日本将棋の類似は他人の空いであるか、15～16世紀の東南アジアに置かれた日本人町を通じて日本将棋がマックルックに影響を与えた可能性が高いことを証明できる。

これが明らかになれば、記録に残りにくい日本将棋の起源を解明することができる。西洋においてチェスは智の象徴として捉えられており、その歴史への関心と共にアジア将棋類の歴史についても関心が高く、最古の東南アジア将棋類の駒を資料化し、研究資料として活用できるようにすることは世界的に注目される。

助成研究者は1993年に奈良県興福寺において日本最古（11世紀後半）の将棋駒15点を発掘した。その後も興福寺駒は日本将棋駒の中では最古の位置を占めているが、この発掘を契機として将棋史の解明に手をつけることになった。将棋史関連の研究論文を執筆し、2013年3月および2014年3月には、現在までの日本将棋の成立に関する見解を公表した。この論文でさらに明確になったのは、日本将棋の起源を解明するに当たっては、東南アジアの将棋類の調査が新たに必要であるということである。東南アジア最古の将棋類は、タイのスコタイ期に確認でき、3カ所の国立博物館等に保管されている。

1999年に橿原考古学研究所に留学したブンニャリット・チャイスワン氏とタイのマックルックの諸特徴について検討を行っていたが、今回、タイの国立博物館等所蔵品等の資料調査が可能となったため、この研究プロジェクトを計画した。

2. 研究の方法

a. マックルック駒の資料化と分析

タイ国立博物館等のタイ国内に所蔵されているスコタイ及びアユタヤ時代のマックルック駒を調査した。主に陶器製の駒である。

当該期のマックルック駒は東南アジアで確認できるもっとも古い駒資料であるため、これを写真撮影し、実測作業を行い図化した。図化に当たっては、重要な資料の一部を三次元計測によりデジタルデータとしても記録をおこなった。この資料を基にマックルック駒の形態の分類を行った。



写真1 バンコク大学所蔵駒

b. 定期研究会の開催

収集した資料の分析作業、資料化と併行して、将棋史研究者と共同して定期的な研究会を開催した。ほぼ隔月で大阪商業大学アミューズメント産業研究所にて開催した。

c. タイ人研究者招聘研究会の開催

タイ人研究者 2 名を招聘し、大阪商業大学において研究成果の分析と意見交換をおこなった。その後、将棋史研究者を交えて研究成果発表を行った。

3. 研究成果

今回の研究成果としてあげることのできるものとしては、かねてより将棋類の東南アジア、東アジアへの伝播問題に関連して世界的に注目を集めていたタイ国のマックルック駒を資料化したことである。約 150 点の撮影と一部の実測、3D データ化を達成した。これを公表すれば、世界的に将棋史研究者が利用可能な研究の基本資料となる。

今回知り得た新しい情報としては、タイ国内で最古の駒として認識されていたスコタイ期の宋胡禄駒よりも古い可能性がある駒を専門家と共に検討したことである。個人コレクター所蔵のブリラム窯駒は、11 世紀末～13 世紀前半の範囲で捉えることのできるものであり、相対的にはスコタイ期とされてきたマックルック駒よりは古い時期に属している。ただし、注意すべきことはタイ陶磁史の専門家であるパリワート・サマプリーチャコーン氏によれば、このマックルック駒の年代は 11 世紀末～13 世紀前半の年代で捉えるべきもので、現在の研究段階ではそれ以上の年代特定は不可能であるとのことを確認した。従って、11 世紀末までその年代が遡る可能性はあるものの 13 世紀前半の製作の可能性もあり、最古のマックルック駒の年代を 11 世紀末とするものではない。



写真2 マックルック駒の3D写真

このほか 15～16 世紀の駒を大量に保有するバンコク大学アジア陶磁博物館の資料を約 100 点について調査を行うことができた。調査の終了後、さらに 70 点のマックルック駒が所蔵されていることが半明したため、いずれ追加の補足調査を行う予定である。

今回資料化したマックルック駒の最終的な分類と分析作業は完了していないため流動的ではあるが、現在までの分析で明らかになったことを以下のことである。

マックルックの「歩兵」相当駒は「ピア(貝)」と呼ばれ、実際に宝貝が駒として用いられることがある。この宝貝の形状が反転可能な形状であることもあり、日本将棋に見られる「成駒の反転」というルールがマックルックでは「ピア」のみで確認できる。今回の調査ではスコタイ期からアユタヤ期に至る陶製マックルック駒を 150 点ほど調査したが、宝貝の形態を模した陶製ピア駒は存在しなかった。また、ピア駒の可能性のある小型駒があるが、反転した場合に安定して置ける形状ではないものが多い。ただし、底面は平坦、上面は緩い凸形状の小型駒もあり、これについては反転使用も不可能ではない。

以上のことからすれば、今後の詳細な検討が必要な段階ではあるが、ピア駒の「成駒反転」ルールの成立時期は、アユタヤ期以後の可能性はある。この想定が正しいとするならば、日本将棋とマックルックの強い類似性を示す要素である「歩兵駒相当の成駒反転」ルールは東南アジアの将棋類を起源とするものでないことを示している。つまり、日本将棋はインドから中国へ伝わったものが伝来したものであり、東南アジアを経由した可能性は低いと想定した。